

ボランティアグループ 小樽市犬管理所ドッグエンジェル HIKARU

ボランティアグループ小樽市犬管理所ドッグエンジェル HIKARU は、小樽市保健所の犬管理所に収容された捕獲犬や引取り犬等の殺処分を無くし、新しい飼主への譲渡を進めるため、2005年（平成17年）に動物愛護の活動を開始しました。

捕獲犬や引取り犬等の収容犬は、心身共に傷を負っているため、なかなか心を開かず、人におびえたり、人を威嚇する等の問題行動を取る場合が多く、そのままでは新しい飼主への譲渡が難しいため、HIKARUは「人に馴れた普通の飼い犬にして譲渡する」ことを目標としました。

方法は、単にかわいそうだから世話をするというのではなく、普通の飼い犬と同じように、静かに語りかけ、収容室の清掃、餌やり、散歩、ブラッシングを繰り返し行ない、「人は怖くない」と教えることでした。

犬管理所は狂犬病予防法に基づいて、殺処分までの一時的な収容を目的としており、照明や暖房もない動物愛護とは程遠い施設でした。山間に建っており、周囲に民家はなく、夜間は闇に包まれます。連休中は保健所の職員も不在のため、HIKARUは犬管理所の鍵を借りて、収容犬の世話を続けました。

冬季間は雪と寒さとの戦いです。一晩で腰まで降った雪を保健所職員と一緒に除雪し、収容室のドアが開くまで一時間以上かかることもありました。

他のボランティアグループが収容室の断熱工事をしてきましたが、厳冬期は氷点下となります。HIKARUが市民から寄附を募った毛布で寝る場所を作り、コンクリートの床にはダンボールと新聞を敷き、毎日交換しました。水道水はすぐ凍るため、飲み水として、きれいな雪を容器に入れて置きました。二つの収容室に電気ストーブが入ったのは、かなり後になってからでした。

季節が移り、吠えられても、咬まれても、その基本姿勢を変えずに世話を続けていると、収容犬は次第に人への警戒心を薄め、表情も落ち着き、理由もなく吠えたり、咬むことも減って、「普通の飼い犬」へと変化していきました。

収容犬には、人への不信感が強い犬や老犬等、譲渡が難しい犬もいましたが、HIKARUは「人に馴らすこと」「飼い主を探すこと」をあきらめませんでした。

収容期間が長くなると、犬管理所を管理している保健所は、「収容期間は無期限ではない。」との立場であったことから、しばしば対立しました。また、重い病気で治療の見込みのない犬は、「安楽死」を選択すべきと主張する保健所と、残りの生をまっとうする「見守り」を訴える HIKARU との間で討論となり、動物愛護とは何かを問われました。

保健所の考えが優先されましたが、HIKARUの想いが通って、管理所で最期の時間を過ごした犬も何頭かいました。また、せめて残りの時間を人の家で迎えさせたいとの思いから、メンバーが引き取り、看取ったケースもありました。

普通の飼い犬へと変化した収容犬は、新しい飼主へ譲渡される事が多くなりました。譲渡数は、2007～2017年度で200頭以上となり、そのほとんどがHIKARUが関わった収容犬です。殺処分0も平成28年度に達成されました。

しかし、いくら譲渡を進めても、保健所が捕獲した後、飼い主が現れないケースやしつけが出来ず手に負えないと引取りを依頼してくるケース等がなくならない限り、根本的な問題は解決しません。

近年は、イベントやチラシ等により、市民に対する終生飼養や適正飼養の啓発活動にも力を入れるようにしています。

HIKARUはボランティア団体であるため、収容犬や動物愛護に対するメンバーの想いには温度差があり、活動ルールや活動方針をメンバーに浸透させていくのが難しく、「何を目指しているか」を常に明確にして活動を続けなくてはなりませんでした。現在のHIKARUは、ボランティアグループと任意団体とに分かれ、任意団体HIKARUは保健所から犬管理業務を正式に受託し、収容中の健康管理や人への馴化を強化しています。

一方、老朽化した施設での業務継続やボランティアや正式メンバーの確保、引き取り猫の問題など、保健所とともに新旧の課題と向き合っているところです。